

表2 アメリカメジャーリーグ公式戦の各チームの年間バント数(個)

ナ・リーグ (各チーム162試合)			ア・リーグ (各チーム162試合)		
西地区	中地区	東地区	西地区	中地区	東地区
1位 72	1位 77	1位 75	1位 43	1位 53	1位 28
2位 71	2位 62	2位 62	2位 19	2位 39	2位 14
3位 91	3位 66	3位 82	3位 9	3位 42	3位 21
4位 57	4位 69	3位 69	4位 37	4位 44	4位 40
5位 88	5位 43	5位 91		5位 46	5位 34
	6位 56				
			1チーム平均 54 1試合あたり 0.33		

また、日本の各チームのうちバント数の少ない2チーム(いずれもパ・リーグで54個と56個)の監督がアメリカ人であることは、興味深い点である。試みに、この2チーム以外のパ・リーグ4チームで、1試合ごとのバント数を算出すると、0.63となって、セ・リーグの0.64とほぼ同じ値となる。

日本ではアメリカの2倍近くバントを用いていることになるが、必ずしもそれが必要不可欠であるとは言えないのではないだろうか。

3.2 安打数・打率・得点とバント数との関連の検討

日本のプロ野球公式戦レギュラーシーズンの全試合の通算記録から、チームごとの安打数・打率・得点・バント数を調べ、チームごと1試合ごとのバント数を算出して比較した。

安打数が多ければ得点も多くなるのが自然だと思われるが、実際には多少のズレがあり逆転が起きている。これらのチームのバント数に着目すると、バント数が多いと安打数の割には得点があがらない傾向があることがわかる。例えば、バント数が100以上の3チームはいずれも、安打数の少ないチームの得点よりも少ない点数にとどまっている。パリーグの4位チームと5位チームの様に、安打数がほぼ同じでもバント数(97と54)が多い4位チームの得点は、5位チームよりも約80点も少なくなっている。打率でも同様のことが言えて、パリーグ1位チームと2位チームの打率は.282と.281で変わらないのに、バント数(86と56)が多い2位チームの得点が約80点少なくなっている。

これらから、バントを多用することが得点しにくさにつながっていることが推察できる。

3.3 送りバントの有無による得点期待値の差の検討

2005年シーズン前半の432試合の中にあつた分析対象ケースの数は表4の通りであつた。

表3 安打数・打率・バント数・得点の関連

チーム	安打数(打率)	得点	バント数
セ1位	1401 (.274)	731	85
セ4位	1389 (.276)	591	103
セ6位	1374 (.275)	615	105
パ1位	1336 (.282)	740	56
セ3位	1324 (.265)	621	119
セ2位	1323 (.269)	680	82
セ5位	1300 (.260)	617	69
パ2位	1300 (.281)	658	86
パ3位	1240 (.269)	604	88
パ5位	1203 (.254)	605	54
パ4位	1202 (.260)	527	97
パ6位	1166 (.255)	504	70

(安打数の多い順に並べてある)

表4 分析の対象としたケースの数

	送りバントあり	送りバントなし	合計
無死1塁	301	1539	1840
無死2塁	62	414	476
無死1・2塁	81	345	426
合計	444	2298	2742

表5 送りバントの有無による得点期待値の比較

	送りバントあり	送りバントなし	有意差
セ・リーグ	0.84	0.97	N.S.
パ・リーグ	0.98	1.16	N.S.
全体	0.91	1.06	○

3.3.1 送りバントの有無による得点期待値の比較

「送りバントあり」と「送りバントなし」のケース、それぞれでの得点期待値は表5の通りであつた。

t検定の結果もあわせて示した。○印は、危険率5%未満の場合である。

大きな差があると言えるかどうかは別として、「送りバントなし」のケースの方が得点期待値が大きくなっていることがわかる。

3.3.2 細かい状況別の分析の結果

試合の序盤・中盤・終盤に分類した場合の特徴、得点差が小さい場合の特徴、次打者の打順による違い、も考慮して、上と同様に送りバントの有無による得点期待値の差の分析を行った。

(1) 試合の序盤・中盤・終盤

試合の展開を考慮してバント作戦は選択されるので、試合の序盤・中盤・終盤のそれぞれに分けて、送りバントの有無による得点期待値の差を分析した。結果は表6の通りであり、序盤・中盤ではバントの有無による差は大きくないが、試合終盤では「送りバントあり」の場合の得点期待値が低くなっていた。

表6 試合の序盤・中盤・終盤で分けた場合の送りバント有無と得点期待値の関係

	送りバントあり	送りバントなし	有意差
序盤 (1~3回)	1.05	1.17	N.S.
中盤 (4~6回)	1.01	1.04	N.S.
終盤 (7回以降)	0.67	1.00	○

従来、終盤になるほど、送りバントを用いて確実に1点を目指すべきだと考えられているが、実際は送りバントを用いるとかえって得点につながりにくいことがわかる。試合終盤に優秀な抑え投手に対する時などを考えると、バントで1アウトを献上すると得点は難しくなる、という解釈も可能である。

(2) 得点差

一般的には、送りバントは、得点差が小さいときに頻繁に用いられるものである。そこで、得点差が2点以内の場合だけを取り出して、送りバントの有無と得点期待値との関係を見た。なお、2点差以内には、リードしている場合とされている場合の双方を含んでいる。その結果は表7の様で、これも従来の考え方から予想されるのに反してバントなしの方が得点期待値が高くなっている。

表7 得点差が2点差以内の場合の送りバント有無と得点期待値の関係

	送りバントあり	送りバントなし	有意差
2点差以内	0.88	1.05	○

表8 次打者の打順ごとに調べた送りバント有無と得点期待値の関係

	送りバントあり	送りバントなし	有意差
(バ・リーグ) 2番打者	0.88	1.27	○
(バ・リーグ) 8番打者	0.66	1.20	○
(セ・リーグ) 6番打者	0.14	0.85	○

(3) 打順

打順は様々な要因が複雑に絡んでくるころではあるが、有意差が見られるものを表8にあげた。従来、「2番打者にはバントの上手な者を入れるべきである」というのは、セオリーのように言われる考え方である。2番打者が送りバントで走者を進めて3番打者以降の打力に期待するという理由からであろうが、多くのチームでそれが採用されてきた現状がある。しかし、今回の分析結果によると、2番打者が送りバントをした場合は、そうでない場合に比べて、得点期待値が低くなっていることがわかる。2番打者の送りバントは、あまり得点に貢献するとは言えない様である。近年、日本のプロ野球でも、バントよりもヒッティングを多用する2番打者が出てきているが、それは不合理なことではないと言ってよいであろう。

表9 送りバント有無と得点期待値の関係からみたチーム別の傾向

	送りバントあり	送りバントなし	有意差	
(A) セ1位	1.68	>	1.06	○
パ1位	1.69		1.51	N.S.
パ4位	1.02		0.86	N.S.
セ4位	0.83		0.77	N.S.
セ6位	0.80		0.79	N.S.
(B) セ3位	0.60		0.88	N.S.
パ6位	0.97		1.05	N.S.
パ2位	1.09		1.18	N.S.
パ3位	0.37	<	1.05	○
パ5位	0.75	<	1.31	○
(C) セ2位	0.58	<	1.14	○
セ5位	0.61	<	1.11	○

3.3.3 チーム別の傾向による類型化

送りバントの有無による得点期待値の差をチーム別に計算した時に、似通った傾向を持つチームが見られたので、表9に示す。(A)の2チームは「送りバントあり」のほうが